展の宗教的背景について、春日茂男氏が衰退産業地域の発生と代替産業導入の問題点について、川崎健史氏が滋賀県瀬田大萱工業団地の計画調査について、川端弘氏が湖西高島郡の綿織物工業地の生産基盤と企業系列化の問題について、松下清雄氏が人間生活にプラスやマイナスの影響を与える様々な宗教について執筆している。

次に文化・民族地理の分野では、宮畑巳年生氏が滋賀県下の山間二集落における宮座とその内部での家格について、岩田慶治氏が主としてインドシナ半島諸民族のカミや精霊に関する観念について、米倉二郎氏が水稲作起源地に関する学説展望について、石川栄吉氏がオセアニアのマルケサス原住民の食生活について、石田寛氏がオーストラリアの白豪主義の形成と変貌について、それぞれ論文を執筆している。

歴史地理の分野の論文としては、日本に関するものでは、縄文式時代の沖積地質学的編年についての神尾明正氏のもの、関東・中部地方における鎌倉街道の分布と遺跡についての河部正道氏のもの、地割から見た江戸城下町の成立についての柴田孝夫氏のもの、紀州の藩政村名の分類とその分布についての近藤忠氏のもの、「土佐州郡志」による藩政村の形態と規模についての山崎修氏のもの、古西近江路に沿う穴太部落の歴史交通地理学的性格についての藤岡謙二郎氏のものがあり、外国に関するものとしては、中世西ドイツのフランク植民と街村プランに関するニッツ説の検討についての水津一朗氏のものがある。

また、地誌的分野の論文としては、木村憲治氏の琵琶湖内の中之湖の変貌についてのものと、浅井辰郎氏のアイスランドの文化と気候変化についてのものがある。

以上の諸論文のほかに、巻末には小牧博士の年譜と著作目録とが付せられ、前掲の門下生の論文の多彩さと共に、博士の学徳の広さを余す所なく示している。

（B5判五二六頁　昭和四三年一〇月　大明堂刊　定価三、八〇〇円）

（須原芙士夫）

BEITÄGE ZUR GENESE DER SIEDLUNGS- UND AGRARLANDSCHAFT IN EUROPA

Rundgespräch vom 4. Juni bis 6. Juli 1966 in Würzburg veranstaltet von der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Geographische Zeitschrift, Beihefte, Wiesbaden 1968.

ここ一〇年間、ヨーロッパの集落・農業地理学者は、数次にわたる国際的な共同討議をこころみてきた。本書は、ナンシー（一九五七年）、ヴェドステナ（六〇年）、バーミンガム（六四年）についで、一九六六年六月にヴュルツブルクで開催された研究の内容を収録したもの。

イギリスのA. R. H. Baker「中世ケントにおける農地」は、中世史料を厳格にふまえて、ミッドランド農地との相違を立証したもの。フランスのP. Brunet「バスノルマンディにおけるボカージュ」、Fr. Gay「カムパーニュ デュ ベリの景観と経済」、A. Meynier「ブレトンの地条」、J. Peltre「一六―八世紀のロレーヌにおける測量法」、X. de Planhol「ロレーヌ農村集落の北限」

は、いずれもフランス学派の伝統的手法を駆使したもの。さらにベルギーの Ch. Christians「ベルギーのワロン地方における孤立農圃」、A. Verhulst「中世フランドルにおける農村景観」があり、デンマークの S. Gissel「一七〇〇年以前のゼーラントの三圃農業」は、一三世紀にこの農法の痕跡が分散的にみられるが、その普及は一六世紀をまたねばならないことを実証し、スウェーデンの G. Enequist「一七〇〇年頃のスウェーデン集落」は、一〇戸以上の集落はこの地方では大集落で、南部の旧デンマーク領に多いこと、北欧独特の「太陽分割制」と大集落との関連についても蓋然性があることについて述べている。

ポーランドの M. Kietczewska Zaleska「オメッフッェ地方における農村集落形態」では、一六世紀王領地の規則正しい平行状の三圃農地や、より古い二圃農地の存在が注目をひく。

主催国ドイツでは、H. Grees「集落の荒廃過程」、W. Lutz「チロルにおける農業集落」、W. D. Sick「ヴェルテムベルクのコイパー山地における集落発達の比較研究」、W. Sperling「スロヴァキアにおける集落形態」など、いずれも手堅い形態発生学の手法が駆使されている。W. Haarnagel「北海海岸地方の先史集落形態」は発掘成果にもとづいて、住居形式・盛土の成立・紀元前五―六世紀の散村や小村をはじめとする集落形態の変化・経済生活の推移などを推定したもの。W. Hüttenroth「近東における紐状ブロック農地と開拓」と J. H. Nitz「北インドにおける農村集落」は、ヨーロッパ集落研究の観点をアジアにひろげたもので、農地形態と古オスマン法、灌漑施設、開拓などの関連がとくに注目される。

研究対象や方法には国ごとのちがいがあるが、相互の討議を重ねて、全ヨーロッパの集落、農地を共通した発展系列の上に位置づけようとする努力の跡が感ぜられる。最後に付せられた H. Uhlig と C. Lienau の「農業景観の術語に関する調査討議の報告」にも、こうした配慮が明白であり、とくに後者は、ブロック農地・ゲヴァン（耕区）・アルメンデ（入会地）などに精密な細分類をこころみ、概念の統一を企てている。

（水津一朗）

青銅遺物図録
――八・一五後蒐集――

朝鮮半島における初期金属文化の研究は、関係資料の大幅な増加もあって、第二次世界大戦以後、とくに最近の十年間に、めざましい発展とげた。このことは、南北に共通する。ここに紹介する『青銅遺物図録』には、韓国の国立博物館が一九四五年八月十五日以降に蒐集した青銅製遺物のうち、初期金属文化に関する主要なものを選んで収めてある。同館の「学術資料集」第一冊として一九六八年末に発刊された。

写真図版三十三枚。実測図版二十二枚、巻末の解説十九頁のこの図録には、出土地点ごとに同時に見出された遺物を網羅して収めたこと、写真だけでなく実測図多数を入れたこと、解説文のなかに出土遺跡に関する詳しい記述があることなど編者の工夫のあとが認められる。言うまでもなく、考古学者にとってありがたいのは、出土地点と出土状態が明確な一括遺物群である。したがって、そのような一括遺物群十一件が、本図録の大半を占めるのは当然である。それらのなかにあって、特に、これからの学